

アショー・チン語における inverse marker *mǎ-*

大塚 行誠

キーワード：ミャンマー、ヤンゴン、アショー・チン語、人称表示、inverse marker

要旨

本論文ではチベット・ビルマ語派チン語支南部チン語群のアショー・チン語に見られる動詞接頭辞 *mǎ-* について、形態統語的な観点から考察する。動詞接頭辞 *mǎ-* は、inverse marker としての機能を持ち、主に被動者や受領者などが発話行為の参与者である場合、動詞に付加する。

1. 使用地域と話者人口

アショー・チン語 (ISO 639-3: csh) は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派チン語支の南部チン語群に属する (西田 1989, Bradley 1997)。その使用地域はミャンマー連邦共和国南西部のヤンゴン地方域、バゴ地方域、マグェー地方域、エーヤワディー地方域およびヤカイン州に広く点在する。更に、SIL International によればバングラデシュにも話者がいる。先行文献 (§3.) の記述と筆者が調査協力者から聞いた話をもとに、ミャンマー国内におけるアショー・チン語の使用地域を図1に示す。



図1 ミャンマーのアショー・チン語の使用地域 (使用地域内に話者コミュニティが点在する。)

SIL International によれば、2011年の時点でミャンマー側に約 30,000

人、バングラデシュ側には約 4,000 人のアショー・チン語話者がいる。本論文で考察の対象とする言語は、ミャンマー連邦共和国のヤンゴン市で話されているアショー・チン語である。

チン語支の言語の多くがアラカン山脈中部のチン丘陵一帯で話されるのに対し、アショー・チン語話者の多くはエーヤワディー川下流域の平野部で暮らしている為、「平地チン族 (Plain Chin)」とも呼ばれる。エーヤワディー川下流域にはビルマ語話者が多く暮らしており、アショー・チン語は他のチン語支の諸言語に比べ、語彙の面でビルマ語からの影響を強く受けている。

2. 本論文で扱うデータ

筆者は、2012年7月から2014年8月までの間、ヤンゴン市インセイン (Insein) 地区のアショー・バプテスト教会 (Asho Baptist Church) にて計約4か月間にわたる断続的な調査を行った。

インセイン地区にはカレン族やモン族をはじめ、少数民族の教会が数多く建ち並んでいる。アショー・バプテスト教会ではアショー・チン語による日曜礼拝や各種集会、日曜学校などが定期的に開かれており、多くの話者が参加している。また、この地区にはアショー・チン民族党 (Asho Chin National Party) とアショー・チン言語文化中央委員会 (Asho Chin Literature and Culture Central Committee) のヤンゴン事務局がある。アショー・チン言語文化中央委員会は、アショー・チン語による教育活動や、宗教と地域の枠を超えた文化活動を推進しているほか¹、アショー・チン語とビルマ語の両言語で書かれた不定期刊行誌 အရှုအဝါဝိဝိး နာမာပာဝါဝါ (『アショーの光雑誌』) を発行している。

2014年の時点において学校教育で使用する言語はビルマ語と英語のみであり、日常のコミュニケーションでも公用語のビルマ語を用いるほうが多い。その為、ヤンゴン市内に限って言えば、アショー・チン語話者の大半はビルマ語も流暢に話すことができる。

調査協力者は、ヤンゴン市出身のアショー・チン語話者 Salai Kyaw Htwe (*sʰālɑr˧˥cəʰhwe˧˥*) Hercule 氏である (以下、SKH 氏と呼ぶ)。SKH 氏は1962年7月生まれの男性で、両親はミャンマー南西部ヤカイン州のグワ (英語名: Gwa, ビルマ語名: ၵ) 市出身である。SKH 氏は日頃から親族や近所の人とアショー・チン語で会話している。また、SKH 氏は、アショー・チン言語文化中央委員会の主要メンバーとして文化的なイベントの企画・運営やアショー・チン語の初等読本を編集する業務に携わっており、アショー・チン語話者の言語状況と文化に関して豊富な知識を持っている。そこで、現地調査ではSKH 氏から協力を受け、ビルマ語を主な媒介言語としてアショー・チン語の基礎語彙と基本的な文法事項について聞き取り調査を行った。本論文で提示するアショー・チン語のデータは筆者の調査を通してSKH 氏から得たものである。

3. 先行文献

管見の限り、アショー・チン語を言語学的な視点から記述したものには、Fryer (1875) によるアショー・チン語タンドウエ (Sandoway) 方言 (ミャンマー西部、ベンガル湾沿岸の町タンドウエ市における方言) の簡単な文法概説と語彙のリスト、Houghton (1892, 1895) によるアショー・チン語ミンブー (Minbu) 方言 (ミャンマー中部、内陸平野部の町ミンブー市における方言) の語彙リスト、そして上述の文献をまとめた Grierson によるアショー・チン語の概説 (Grierson 1904: 331-346) がある。どの文献もラテン文字を用いた独自の表記法でアショー・チン語を記述しており、タンドウエ方言とミンブー方言は現在ヤンゴン市内で話されているアショー・チン語と異なるようである。

¹ アショー・チン語の話者が主に信仰する宗教は、キリスト教と上座部仏教である。アショー・チン言語文化中央委員会の運営委員にはキリスト教徒のほかには仏教徒もいる。

Grierson によれば、アショー・チン語はチッタゴン丘陵付近で話される北部方言と、ヤカイン州で話される南部方言の少なくとも2種類の方言に分かれる (Grierson 1904: 341-342)。また、VanBik は、あるアショー・チン語話者から聞いた話として、アショー・チン語には *Settu, Laitu, Awttu, Kowntu, Kaitu, Lauku* という6種類の地域方言があり、各方言間における相互理解の可能性は高いと述べた (VanBik 2009: 37-38)。しかし、アショー・チン語の言語資料は極めて少なく、各方言の実態は未だ把握できていない。また、筆者の調査でも語彙や文法の面において地域差が少なからず見られた。詳細な方言分布を見るには更に広範囲での調査が必要である。本論文ではアショー・チン語ヤンゴン方言に調査の対象を絞る。

4. 文法概要

自動詞節における無標の語順は SV (例 (1) 参照) であり、他動詞節における無標の語順は AOV (例 (2), (3) 参照) である。述語が文末に立つという文法的な制約は比較的強く、述語以外の構成要素の順序は自由である。なお、アショー・チン語は他の多くのチン語支の言語と同じく能格型言語の特徴を持つ。一人称と二人称の人称代名詞を除き、他動詞の主語にあたる名詞句の後には能格助詞 *=nəʔ^L* を付加する (例 (2), (3) 参照)。

(1) *sǎlar^L ja^H kaʔ^L=kaʔ^L*

Mr. PN cry=3.REAL

「チャーさんは泣いた。」

(2) *naʊn^L nǎmo^H pan^H nǎ=hmaʔ^H=mə^L*

2SG DEM flower 2SG=know=Q

「あなたはその花を知っているの？」

(3) *pyeʔ^Lp^Hya^L=nəʔ^L pǎs^Hɛn^H=ŋa^L jǎpan^L+bǎha^H=lwi^H ʔǎ=paɪʔ^L=kaʔ^L*

PN=ERG PN=OBJ Japan+snack=PL 3SG=give=REAL

「ピエーピョーはパセーンに日本のお菓子をあげた。」

5. 考察

5.1 人称助詞

アショー・チン語で人称と数を表示するには、人称代名詞 (自立語) を用いる方法と人称助詞 (接語) を用いる方法の2通りがある。アショー・チン語における人称代名詞を表 1 に、人称助詞を表 2 に示す。なお、双数を示す代名詞と助詞²もあるが、特に双数を示す助詞は現在ほとんど使われていないとインフォーマントが指摘していることと、本論文の内容と直接関係しないことから記述の対象から外した。

² 双数形の人称代名詞: *ce^Lhni^H/cǎme^Lhni^H* (1DU); *naʊn^Lhni^H/naʊn^Lme^Lhni^H* (2DU); *ya^Lhni^H/ya^Lme^Lhni^H/p^o^Lhni^H/p^o^Lme^Lhni^H/nǎhwe^L/nǎhwe^Lhni^H* (3DU), 双数形の人称助詞: *nǎ=/=hwe^L* (DU)

人称助詞は主語の人称と数を表すが、義務的に付加する要素ではなく、会話では省略されることもある。また、中部チン語群のミゾ語 (Chhange 1993:89-92) や南部チン語群のダーイ・チン語 (So-Hartmann 2009: 231-246) 等に見られるような目的語の人称を表す人称助詞は無い。

表 1 人称代名詞 (自立語)

	SG	PL
1	<i>ce^L</i>	<i>cāme^L</i>
2	<i>naʊN^L</i>	<i>naʊN^Lme^L</i>
3	<i>p^ho^L/yaʔ^L</i>	<i>p^ho^Lme^L/yaʔ^Lme^L/nāhe^L</i>

表 2 人称助詞³ (接語)

	他動詞		自動詞	
	SG	PL	SG	PL
1	<i>kǎ=</i>	<i>(kǎ)mǎ=</i>	<i>kǎ=</i>	<i>(kǎ)mǎ=</i>
2	<i>nǎ=</i>	<i>mǎ=</i>	<i>nǎ=</i>	<i>mǎ=</i>
3	<i>ʔǎ=</i>	<i>mǎ=</i>	無し	無し

自動詞節で三人称の主語を表す人称助詞は無い。ただし、一部の動詞では、動詞自体あるいはそれに後続するモダリティの助詞 =*fiə^H* (REAL)/=*fiar^H* (IRR) の声調交替で主語の人称を示すことがある (例 (4), (5) 参照)。

(4) a. {*kǎ=* / *nǎ=* } *lo^H=fiar^H*

1SG= 2SG= come.1/2=IRR

「{私が/君が} 来る。」

b. *lo^L=fiar^H*

come.3=IRR

「彼が来る。」

(5) a. *zʊN^L+hʊN^H=bʊ^L* {*kǎ=* / *nǎ=* / **ʔǎ=* / *mǎ=*} *kwar^H=fiə^H*

mountain+above=ALL 1SG= 2SG= 3SG= PL= climb=REAL

「山の上に {私が/君が/*彼が/私たち, 君たちが} 登った。」

³ 動詞句の後に複数を表す助詞 =*he^L* を付加することで複数の主語を表す場合もある。

例 *p^ho^Lme^L s^hʊN^Hlar^H=he^L=fiə^H* 「彼らは貧しかった。」

3PL poor=PL=REAL

b. $z\text{ON}^L + h\text{ON}^H = b\text{O}^L$ $kwa^H = fi\text{a}^L$
 mountain+above=ALL climb=3.REAL

「山の上に彼が登った。」

動詞句の後に助詞 $=la^H$ を付加すると否定文が形成される。助詞 $=la^H$ を動詞の直後に付加する場合、人称助詞は現れない⁴ (例 (6) 参照)。

(6) a. $*ce^L$ $\text{?}\check{a}\eta\text{O}^L bi^H = fi^L$ $k\check{a} = g\text{ON}^H = la^H$
 1SG morning=LOC 1SG=free.NEG=NEG

b. ce^L $\text{?}\check{a}\eta\text{O}^L bi^H = fi^L$ $g\text{ON}^H = la^H$
 1SG morning=LOC free.NEG=NEG

「私は午前中は空いていない。」

5.2 動詞接頭辞 *mǎ-*

5.2.1 他動詞述語文

他動詞を述語に持つ節 (例 (7) と (8) 参照), あるいは二重他動詞を述語に持つ節 (例 (9) と (10) 参照) では, 被動者または受領者に発話行為の参与者 (speech-act participant), すなわち話し手か聞き手が含まれる場合, 述語動詞に動詞接頭辞 *mǎ-* を付加する⁵。また, 被動者または受領者が発話行為の参与者自身である場合に限らず, 発話行為の参与者が所有する物や人であっても, 動詞接頭辞 *mǎ-* (例 (11) b., 例 (12) b. 参照) を付加することがある。

なお, 動詞接頭辞 *mǎ-* を付加する場合, *mǎ-* 直後の音節は常に高声調で現れ (例 (7), (9), (10), (12) b. 参照), *mǎ-* 直後の子音が *p, t, k, c, s* であれば *b, d, g, j, z* に有声化する (例 (10) 参照)。

(7) $s\check{a}lar^L$ $ja^H = na^L$ $na\text{ON}^L = \eta a^H$ $m\check{a}-d\check{a}in^H = \eta ar^H$
 Mr. PN=ERG 2SG=OBJ INV-beat.INV=IRR

「チャーさんは君を打つだろう。」(動詞の原形: $d\check{a}in^L$ 「打つ」)

(8) $na\text{ON}^L$ $ce^L = ha^H$ $m\check{a}-hma^H = ka^H = ma^L$
 2SG 1SG=OBJ INV-know=REAL=Q

「君は私を知っているの?」

(9) $s\check{a}lar^L$ $c\check{o}^H we^L = na^L$ $na\text{ON}^L = \eta a^H$ $\text{?}\check{a}c\check{a}^H + zo^H$ $m\check{a}-zo^H = ka^H = ma^L$
 Mr. PN=ERG 2SG=OBJ A sho+letter INV-teach.INV=REAL=Q

「チョートゥエーさんが君にアショー語を教えているの?」(動詞の原形: zo^L 「教える」)

⁴ 否定文中の述語動詞の初頭音節は常に高声調で現れ, 初頭子音 *p, t, k, c, s* は *b, d, g, j, z* にそれぞれ有声化する。例文 (6) では声調交替と有声化の両方が見られる。(動詞の原形: $ko\text{ON}^L$ 「空いている」)

⁵ 動詞接頭辞 *mǎ-* は義務的な要素ではないようで, 会話中省略されることもある。

- (10) *päsʰeNʰ=nəʔˀL* *ceˀL=ɦaʰ* *soʰʔuʔʰ* *mă-baiʔʰ=kəʔʰ*
 PN=ERG 1SG=OBJ book INV-give.INV=REAL
 「パセーンは私に本をくれた。」(動詞の原形: *paiʔˀL* 「与える」)
- (11) a. *naʰɦɪʔˀL* *munˀL-dənʰ=nəʔˀL* *ceˀL* *ʔɪNʰ* *ʔă=pʰyaʔʰsʰiʰ=ɦəʔʰ*
 PN cyclone=ERG 1SG house.POSS 3=destroy=REAL
 「サイクロン『ナルギス』が私の家を壊した。」
- b. *naʰɦɪʔˀL* *munˀL-dənʰ=nəʔˀL* *ceˀL* *ʔɪNʰ* *mă-pʰyaʔʰsʰiʰ=ɦəʔʰ*
 PN cyclone=ERG 1SG house.POSS INV-destroy=REAL
 「サイクロン『ナルギス』が私の家を壊しやがった。」
- (12) a. *pălaʰ=nəʔˀL* *ceˀL* *soʰ=ɦaˀL* *ʔă=dainˀL=ŋəʔʰ*
 PN=ERG 1SG son.POSS=OBJ 3SG=beat=REAL
 「バラーが私の息子を打った。」
- b. *pălaʰ=nəʔˀL* *ceˀL* *soʰ=ɦaˀL* *mă-dainʰ* *baiʔˀL=kəʔʰ*
 PN=ERG 1SG son.POSS=OBJ INV-beat.INV give=REAL
 「バラーが私の息子を打ちやがった⁶。」(動詞の原形: *dainˀL* 「打つ」)

また、動詞接頭辞 *mă-* は、一人称主語を表す人称助詞 *kă=* を除き、人称助詞と共起しない。すなわち、**nă=mă-* (2SG=INV-)、**ʔă=mă-* (3SG=INV-)、**mă=mă-* (PL=INV-) という人称助詞と動詞接頭辞 *mă-* の組み合わせは存在しない。*kă=mă-* (1SG=INV-) の組み合わせの例を以下の (13) と (14) に示した。

- (13) *naʊNˀL=ŋaʰ* *kă=mă-sʰəʔʰ=kəʔʰ*
 2SG=OBJ 1SG=INV-see.INV=REAL
 「君を私は見た。」(動詞の原形: *sʰəʔˀL* 「見る」)
- (14) *laʔʰsʰəNʰ* *kă=mă-baiʔʰ=kaʰ*
 gift 1SG=INV-give.INV=IRR
 「私は君にプレゼントをあげる。」(動詞の原形: *paiʔˀL* 「与える」)

なお、複数形の人称助詞 *mă=* (表 2 参照) と動詞接頭辞 *mă-* は同音である。しかし、動詞接頭辞 *mă-* は上述のとおり、後続要素で声調交替と有声化を引き起こすことから人称助詞 *mă=* とは異なる (例 (15) 参照)。

⁶ 動詞 *paiʔˀL* 「あげる」は語あるいは句の中でしばしば *baiʔˀL* と有声化する。ただし、直前の音が末子音 *ʔ* である場合には *paiʔˀL* という形のままで現れる。

(15) a. *mǎ=toʔʰ=kaɪʰ*

PL=kill=IRR

「私たちは／君たちは [誰かを] 殺すだろう。」

b. *mǎ-doʔʰ=kaɪʰ*

INV-kill.INV=IRR

「私 (たち) を／君 (たち) を殺すだろう。」 (動詞の原形: *toʔʰ* 「殺す」)

次に、否定文と命令文における動詞接頭辞 *mǎ-* の出現制限について述べる。§5.1 で既に述べたとおり、動詞句の後に助詞 *=laʔʰ* を付加すると否定文が形成される。助詞 *=laʔʰ* を動詞の直後に付加する場合、動詞接頭辞 *mǎ-* は現れない (例 (16) 参照)。

(16) a. **sʰǎlaɪʰ jaʰ=nəʔʰ ceʰ=ɦaʰ mǎ-haʊʰ=laʔʰ*

Mr. PN=ERG 1SG=OBJ INV-tell=NEG

b. *sʰǎlaɪʰ jaʰ=nəʔʰ ceʰ=ɦaʰ haʊʰ=laʔʰ*

Mr. PN=ERG 1SG=OBJ tell=NEG

「ヂャーさんは私に言わなかった。」

また、動詞句の後に助詞 *=ɦeʰ* を付加して命令文を形成する⁷。この命令文中において動詞句の表す行為が話し手に向かうものである場合、動詞接頭辞 *mǎ-* ではなく、*ʔǎ-* という別の動詞接頭辞を用いる⁸ (例 (18) 参照)。動詞接頭辞 *ʔǎ-* が無ければ、動詞句の表す行為が第三者に向かうことを表す (例 (17) 参照)。

(17) *bǎɦaʰ mweʰ=moʰ=naʰ nǎmoʰ sʰǎmiʰ=ɦaʰ paɪʔʰ=keʰ*

snack exist=still=if DEM child=OBJ give=IMP

「お菓子がまだあるのならその子にあげろ。」

(18) *bǎɦaʰ mweʰ=moʰ=naʰ ceʰ=ɦaʰ=kʰʷʰ ʔǎ-paɪʔʰ=keʰ*

snack exist=still=if 1SG=OBJ=also DIR.>1-give=IMP

「お菓子がまだあるのなら私にもくれ。」

例 (19) のような気象に関する表現でも動詞接頭辞 *mǎ-* を用いることがある (例 (20) 参照)。

⁷ 直前の音が末子音 *ʔ* である場合には *=keʰ* という形で実現する。

⁸ なお、動詞の初頭音節が低声調の場合、高声調化することで動詞句の表す行為が話し手に向かうことを示すこともある。

例 *bǎɦaʰ mweʰ=moʰ=naʰ ceʰ=ɦaʰ=kʰʷʰ paɪʔʰ=keʰ*

snack exist=still=if 1SG=OBJ=also give=IMP

「お菓子がまだあるのなら私にもくれ。」 (動詞の原形: *paɪʔʰ* 「与える」)

大塚 (2014) では, $ce^l=fa^H$ (1SG=OBJ) 「私に」 や $naoN^l=\eta a^H$ (2SG=OBJ) 「あなたに」といった目的格の句がふつう挿入されないと述べた。しかし, その後の調査で $ce^l=fa^H$ (1SG=OBJ) や $naoN^l=\eta a^H$ (2SG=OBJ) も挿入できることが分かった (例 (20) 参照)。

(19) $yo^H \quad \gamma o^L=fa^H$

rain fall=REAL

「雨が降った。」

(20) a. $yo^H=nə^{\gamma L} \quad ce^L=fa^H \quad m\check{a}-\gamma o^H-nao^{\gamma L}=kə^{\gamma H}$

rain=ERG 1SG=OBJ INV-fall.INV-TRNS=REAL

「私 (のいる場所) に雨が降った。」

b. $yo^H=nə^{\gamma L} \quad naoN^l=\eta a^H \quad m\check{a}-\gamma o^H-nao^{\gamma L}=kə^{\gamma H}$

rain=ERG 2SG=OBJ INV-fall.INV-TRNS=REAL

「君 (のいる場所) に雨が降った。」

5.2.2 使役文

使役文において被使役者が発話行為の参与者である場合, 動詞接頭辞 $m\check{a}-$ を付加する (例 (21) b. 参照)。使役は, 一般動詞と使役動詞 $də^{\gamma H}$ 「させる」から成る動詞句によって表現する。

(21) a. $ce^L \quad s^h\check{a}lai^L \quad ja^H=fa^L \quad \gamma a^H+twe^H \quad k\check{a}=hle^H \quad də^{\gamma H}=kə^{\gamma H}$

1SG Mr. PN=OBJ chicken+egg 1SG=buy CAUS=REAL

「私はチャーさんに鶏卵を買わせた。」

b. $s^h\check{a}lai^L \quad ja^H=nə^{\gamma L} \quad ce^L=fa^H \quad \gamma a^H+twe^H \quad m\check{a}-hle^H \quad də^{\gamma H}=kə^{\gamma H}$

Mr. PN=ERG 1SG=OBJ chicken+egg INV-buy CAUS=REAL

「チャーさんは私に鶏卵を買わせた。」

5.2.3 裨益文・被害文

裨益文において受益者が発話行為の参与者である場合, 動詞接頭辞 $m\check{a}-$ を付加する (例 (22) b. 参照)。裨益は, 一般動詞と動詞 $pai^{\gamma L}$ 「あげる」から成る動詞句によって表現する。

(22) a. $s^h\check{a}lai^L \quad ja^H=nə^{\gamma L} \quad p\check{a}la^H=fa^L \quad bo^H \quad \gamma \check{a}=bu^{\gamma H} \quad pai^{\gamma L}=kə^{\gamma H}$

Mr. PN=ERG PN=OBJ meal 3SG=cook give=REAL

「チャーさんはパラーにご飯を作ってあげた。」

b. *sʰǎlar^L ja^H=nə^{ʔL} ce^L=fi^{aH} bo^H mǎ-bu^{ʔH} pai^{ʔL}=kə^{ʔH}*

Mr. PN=ERG 1SG=OBJ meal INV-cook give=REAL

「チャーさんは私にご飯を作ってくれた。」

一般動詞と動詞 *pai^{ʔL}* 「あげる」から成る動詞句は被害を表すこともある (例 (12) b. 参照)。この場合も被害者が発話行為の参与者である場合、動詞接頭辞 *mǎ-* を用いる。

5.2.4 他動詞化との関連

アショー・チン語における他動詞化の方法のひとつとして声調交替と有声化がある⁹。すなわち、ある動詞の初頭音節が低声調である場合には高声調にすることで他動詞化を示し (例 (23) 参照)、音節初頭が無声子音 *p, t, k, c, s* である場合には *b, d, g, j, z* にそれぞれ有声化することで他動詞化を示す (例 (24) 参照)。

(23) a. *bo^{ʔL}* b. *bo^{ʔH}*
 white white.TRNS
 「白い」 「白くする」

(24) a. *twi^{iH}* b. *dwi^{iH}*
 sweet sweet.TRNS
 「甘い」 「甘くする」

他動詞化した動詞には、さらにアプリカティブ接辞 *-pwi^{iH}* あるいは *-tao^{ʔL}* が接続することもある¹⁰。アプリカティブ接辞 *-pwi^{iH}* を用いた他動詞述語文において、接辞 *-pwi^{iH}* の付加で増えた項、すなわち目的格の句は共同で動作する者を表す (例 (25) 参照)。一方、アプリカティブ接辞 *-tao^{ʔL}* を用いた他動詞述語文において、接辞 *-tao^{ʔL}* の付加で増えた項、すなわち目的格の句は放置された者を表す¹¹ (例 (26) 参照)。共同で動作する者あるいは放置された者が発話行為の参与者である場合、動詞接頭辞 *mǎ-* を付加する (例 (25) b., (26) b. 参照)。

(25) a. *ce^L sʰǎmo^H=fi^{aL} mlo^H+do^{ʔH}=bo^L kǎ=zi^{iH}-bwi^{iH}=fi^{aʔH}*
 1SG teacher=OBJ town+inside=ALL 1SG=go.TRNS-COM=REAL
 「私は先生とダウンタウンに行った。」 (動詞の原形: *si^{iH}* 「行く」)

⁹ さらに、語彙的な自他動詞の交替を見れば、無声子音の無気・有気 (cf. *pya^ʔsi^{iH}* 「壊れる」 / *pʰya^ʔsi^{iH}* 「壊す」) や鼻子音の有声・無声 (cf. *nɔŋ^{iH}* 「におう」 / *hnɔŋ^{iH}* 「かぐ」) による対応も見られる。

¹⁰ 直前の音が末子音 *ʔ* 以外である場合にはそれぞれ語中で *-bwi^{iH}*, *-tao^{ʔL}* と有声化する。

¹¹ 放置された者の項を加えるアプリカティブ接辞 *relinquitive applicative* はチン語支の諸言語に広く見られる。Peterson (1998: 100-101) のライ語 (Lai, Haka Chin) における *relinquitive applicative* の記述を参照。

b. *sʰāmoʰ=nəʔʰ* *ceˀ=fiʰ* *mloʰ+dōʰ=bɔˀ* *mǎ-zɪˀLbwiʰ=fiʰ*
 teacher=ERG 1SG=OBJ town+inside=ALL INV-go.TRNS-COM=REAL
 「先生は私とダウンタウンに行った。」

(26) a. *sʰālarˀ* *jaʰ=nəʔʰ* *pǎlaʰ=fiʰ* *ʔǎ=zɔNˀL-dauʔʰ=kəʔʰ*
 Mr. PN=ERG PN=OBJ 3SG=run.TRNS-RELINQ=REAL
 「チャーさんはパラーを残して走り去った。」(動詞の原形: *sɔNˀ* 「走る」)

b. *sʰālarˀ* *jaʰ=nəʔʰ* *ceˀ=fiʰ* *mǎ-zɔNˀL-dauʔʰ=kəʔʰ*
 Mr. PN=ERG 1SG=OBJ INV-run.TRNS-RELINQ=REAL
 「チャーさんは私を残して走り去った。」

6. まとめ

Givón (1994: 22) は, The generic topic hierarchies のひとつ, Discourse participation の階層として speaker > hearer > 3rd-person を提示した。さらに, DeLancey (1981: 644) は speech-act participants > 3rd pronoun といういわば普遍的な階層を挙げた。アショール・チン語では, ある事態に動作主と被動者という 2 者の参加者があり, DeLancey (1981) の示す階層において動作主が被動者よりも下位にある場合, あるいは動作主と被動者の両者が発話行為の参加者である場合, 動詞接頭辞 *mǎ-* を付加する。すなわち, 動詞接頭辞 *mǎ-* はある種 inverse (反転/逆向/逆行) の機能を持ち, Nocte 語の *-h-* (DeLancey 1981: 641-642) や北部チン語群のティディム・チン語 (大塚 2009) の *ón-* など, チベット・ビルマ語派の一部言語に見られる inverse marker と似た特性を持つ。

このような文法現象は中部チン語群のライ語 (例 (27) 参照) やミゾ語 (例 (28) 参照), 南部チン語群のダーイ・チン語 (例 (29) 参照) には見られない。これらの言語には主語の人称と一致する人称接辞などの拘束形態素のほか, 目的語の人称と一致する拘束形態素もある。

(27) *ʔan-kan-thoʔŋ* (Peterson 1998: 90 一部改編)
 S.AGR.3PL-O.AGR.1PL-hit
 「彼らは, 私たちをぶった。」

(28) *úy-in nán á-seʔ-cé* (Chhangte 1993: 91 一部改編)
 dog-ERG 2SG S.AGR.3-bite-O.AGR.2
 「犬が君を咬んだ。」

(29) *Ngma=xooi=o, kah ni:ngjah pye:n=kkhai.*
 younger brother in law=DU=VOC S.AGR.1SG O.AGR.2DU tell=FUT
 「2 人の義弟たちよ, 私はお前たちに教える。」 (So-Hartmann 2009: 239 一部改編)

一方、北部チン語群のティディム・チン語では、アショー・チン語と同じく、主語の人称を表す人称助詞はあるが、目的語の人称を表す人称助詞が無い。しかし、inverse marker に相当する方向接辞 *óŋ-* があり、目的語が発話行為の参与者を示す場合、義務的に動詞に付加すると大塚 (2009) は述べている (例 (30), (31) 参照)。

(30) *ámàn kái óŋ- sù:i* (大塚 2009: 205)
 3SG.ERG 1SG DIR- kick
 「彼は、私を蹴った。」

(31) *ámà:u náŋ óŋ- tʰèi ci:* (大塚 2009: 207)
 3PL 2SG DIR- know say
 「彼らは、君のことを知っているんだって。」

本論文では、北部チン語群のティディム・チン語 (大塚 2009: 205) と同様、南部チン語群のアショー・チン語にも inverse marking system が見られることを指摘し、inverse marker としての動詞接頭辞 *mǎ-* について形態統語的な面から述べた。最後に、inverse marker *mǎ-* の示す方向性を図 1 にまとめる。

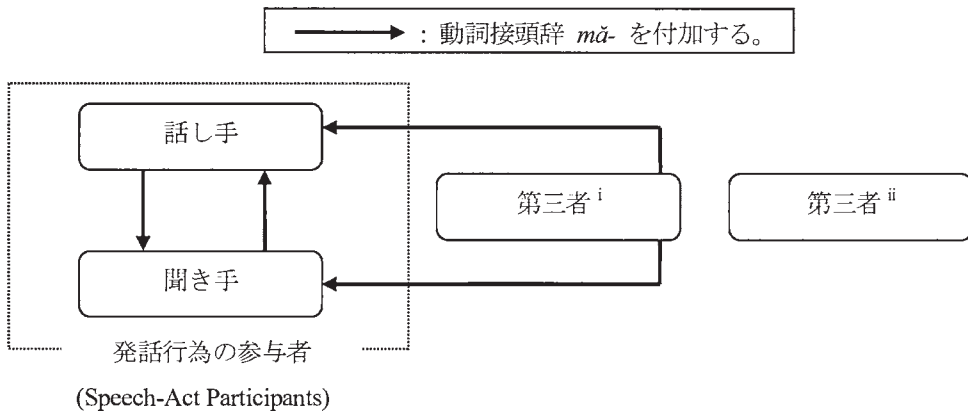


図 1 inverse marker *mǎ-* の方向性

謝辞

本論文に関わる調査は、日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号:24・10915)の助成を受けている。また、ヤンゴン在住のアショー・チン語話者 Salai Kyaw Htwe 氏, Salai Aung Min Hlaing 氏, Salai Tun Hlaing 氏の多大なるご支援と有益な助言無くして本論文を執筆することはできなかった。ここに深く感謝申し上げる。

略号

1: first person, 2: second person, 3: third person, >X: direction toward X, *: ungrammatical, -: affix boundary, =: clitic boundary, +: compound boundary, A: agent-like argument of canonical transitive verb, AGR: agreement, ALL: allative, CAUS: causative, COM: comitative, DEM: demonstrative, DIR: directional, DU: dual, ERG: ergative, FUT: future, IMP: imperative, INV: inverse marker, IRR: irrealis, LOC: locative, NEG: negative, O: patient-like argument of canonical transitive verb, O.AGR: object agreement, OBJ: objective, PL: plural, PN: proper noun, POSS: possessee, Q: question, REAL: realis, RELINQ: relinquitive, S: single argument of canonical intransitive verb, S.AGR: subject agreement, SG: singular, TRNS: transitivity form, V: predicate verb, VOC: vocative.

表記

アショー・チン語の音素と本論文での表記を以下に示す。

[1] 子音音素: /p, pʰ, b, b̥, t, tʰ, d, d̥, k, kʰ, g, ʔ, c[tc], cʰ[tcʰ], j [dʒ], s, sʰ, z, ɛ, h, h̥, m, n, ɲ, hm[ɲm], hn[ɲn], hy[ɲɲ], hɲ[ɲɲ], l, h[l], r[ɹ], w, y[j]/ (新しい借用語には /t, d/ も見られる。)

[2] 介子音: /-y[-], -w-, -l-/

[3] 母音音素: /i, ɪ, e[e(i)], ɛ, a[ɑ~a], ə[ə(ʊ)~ɤ(ʊ)], ɔ, o, ʊ, u, ar[ɑ], aʊ[ɑʊ]/

[4] 鼻音化要素: 母音の後に /n/ を付加して鼻母音であることを示す。例: /an/[ã]

[5] 声調素: 高声調 /H/, 低声調 /L/

[6] *h̥* が初頭子音の拘束形態素には *h̥* に対して以下2種類の音韻規則を適用する。

- *h̥* → *k/ʔ*_ (例 *toʰhmuʔL=kaʰ* 「今日に」, *sʰoʔL=kəʰ* 「鍵で」 cf. *h̥* → *ʔ/ʔ*_ の場合もある)
- *h̥* → *ŋ/n*_ (例 *jaʔLpanʰ=ŋaʰ* 「日本に」, *kʰeLdanʰ=ŋəL* 「鉛筆で」)

参考文献

Bradley, David (1997) Tibeto-Burman languages and classification. In: David Bradley (ed.) *Tibeto-Burman Languages of the Himalayas, Pacific Linguistics Series A* 86:1-72. Canberra: Australian National University.

- Chhange, Lalnunthangi (1993) Mizo Syntax. Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- DeLancey, Scott (1981) An interpretation of split-ergativity and related patterns. *Language* 57(3): 626-57.
- Fryer, G. E. (1875) On the Khyeng people of the Sandoway District, Arakan. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 44: 39-82.
- Givón, Talmy (1994) The pragmatics of de-transitive voice: Functional and typological aspect of inversion. *Voice and inversion*, 3-44. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Grierson, George A. (1904) Tibeto-Burman family, Specimens of the Kuki-Chin and Burma groups. *Linguistic survey of India* 3(3). Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.
- Houghton, Bernard (1892) *Essay on the Language of the Southern Chins (Asho) and Its Affinities*. Rangoon: Superintendent Government Printing.
- _____ (1895) Southern Chin Vocabulary (Minbu District). *Journal of the Asiatic Society* 27(4): 723-737.
- Matisoff, James A. (1976) Lahu causative constructions: case hierarchies and the morphology/syntax cycle in a Tibeto-Burman perspective. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *The Grammar of Causative Constructions*, 413-42. Academic Press: New York.
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 世界言語編』中 2 : 995-1008. 東京 : 三省堂.
- 大塚行誠 (2009) 「ティディム・チン語における方向接頭辞 *óŋ-*」『東京大学言語学論集』28:197-218.
- _____ (2014) 「アショー・チン語における人称標示と inverse marker *mǎ-*」『第 148 回日本語学会大会予稿集』260-265.
- Peterson, David A. (1998) The morphosyntax of transitivization in Lai (Haka Chin). In: Randy J. Rapolla (ed.) *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21: 87-153.
- SIL (Summer Institute of Linguistics) International *Chin, Asho* | *Ethnologue*.
<http://www.ethnologue.com/language/csh> (accessed 2014-8-25)
- So-Hartmann, Helga (2009) *A Descriptive Grammar of Daai Chin*. STEDT monograph 7. Berkeley: University of California.
- VanBik, K. (2009) *Proto-Kuki-Chin: A reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. STEDT monograph 8. Berkeley: University of California.

An inverse marker *mǎ-* in Asho Chin

Otsuka Kosei

Keywords: Myanmar, Yangon, Asho Chin, person marking, inverse marker

Asho Chin (ISO 639-3: csh) belongs to the Kuki-Chin subgroup of Tibeto-Burman languages. This paper examines some morphosyntactic characteristics of the verbal prefix *mǎ-* in Asho Chin. The prefix *mǎ-* is attached to a verb as an inverse marker if the undergoer, such as a patient or a recipient, is a speech-act participant.

(おおつか・こうせい 日本学術振興会特別研究員 PD)